まえがき

コミュニケーション（Communication）と言うと、一般的には会話を通した人と人との情報伝達を思い浮かべる方が多いと思うが、生物の細胞間の化学物質を介しての情報伝達といったミクロな事象から、生物個体間の身振り、音声、匂いや化学物質を介した情報伝達、さらに人と人においても会話だけでなく、視覚や聴覚、接触などを通した知覚、感情、思考などの情報伝達もコミュニケーションと言える。また、他者との情報伝達に留まらず、いわゆる、自問自答や〝夢〟のように他者と自身が登場し、それを自身が視聴するといった自身の内心における情報伝達、さらに地球上に生息する人類を含めた生き物や地球環境そのものに対する人類の情報伝達もコミュニケーションと言えるのではないだろうか。

二〇一一年三月十一日未曾有の大地震・津波・原子力発電所からの大量の放射能漏れといった大災害が東日本を襲った。正に、これまで人類が地球環境にしでかしてきた悪行に対する自然の反撃である。長年に渡る国家・地域間の戦争を初め壮絶な文化的競争が繰り広げられた結果、人類によって取り返しの効かない位の地球環境の汚染が蔓延してきたのである。政府は東日本大震災の爪痕、取り分け原子力発電所の事故は収束されたと宣言したが、誰の目からも明らかなように放射能飛散の原因解明や津波防堤の改修工事もほとんど停滞し、さらに依然として福島の原子力発電所の完全なコントロールも覚束ない状態である。それにもま

して、被災者の精神的・物資的ケアもままならない状態が続いている。このような状況であるにもかかわらず、経済界からの強い要望で原発の再稼働が始まった。国会周辺では多くの国民による極めて強い意思表示としてのデモが続いているが、政府は国民の悲痛なコミュニケーションに対して声ではなく雑音としか聞こえていないようだ。自然災害ではなく東京電力と官邸による人災であることが国会事故調査委員会によって明らかにされた。地震や津波に対する対策を怠り、事故直後の危機管理も素人であったことが暴かれたのである。つまり、政治家や官僚等国を統治する側と国民との間で結ばれてきたはずの良好なコミュニケーションが前者によって裏切られてしまったということである。事故の根本原因は日本人に染みついた慣習や文化にあり、権威を疑問視しない、反射的な従順性、集団主義、島国的閉鎖性にあるという識者の考えに同感である。ただ、その理由だけで贖罪されるものではなく、結果として世界各国に放射能を飛散させた重罪は地球の一構成員としての日本人にとって将来にわたっても背負っていかなければならない重い十字架だと思う。

避難所や慣れない他県で生活を余儀なくされている方々が今年の夏の酷暑や来る冬の厳寒に耐えるだけの対策が政府関係者によってしっかり取られているのか、大変疑問である。物資的ケアはもちろん、精神的ケアが極めて不十分なため、自ら命を絶つ方々が少なくない。大震災前は、家族で良好なコミュニケーションを維持し、連帯感をもって生活をしてきた人達が大震災によって引き裂かれ、そのことで孤独な生活を余儀なくされたことに原因があろう。大震災以来、忘語となっていた「絆」という言葉が様々な場面で使われるようになった。「絆」とか「恩愛」といった、人と人とをつなぎ留め、そこに生まれる情愛や親しみ、つ

まりコミュニケーションの大切さが再認識されたのであろう。

筆者は二〇〇六年『多次元のコミュニケーション』を出版した。生物学的には人間の寿命は一二〇年位とも言われている。しかし、現実的には様々なストレスによって寿命が短くなりせいぜい八〇から九〇歳位である。この長いようで短い自身の人生の道のりだけでなく、他人の、しかも自分では経験出来ないあるいは出来なかった道のりを己の心に重ねることが出来たらどんなにか充実した人生を送れるのではないかと考え、様々な時と空間で活躍している人達の感性、世界観、人生観や技力などによって得た、他者とのコミュニケーションの方法・技について執筆していただいた。この小書は多くの方々に講読され、大学のテキストとして使用されたり、大学入学試験問題に引用されたりした。今回、前述のように「絆」の重要性が再認識されている現状を踏まえ、正に様々な場面で特異なコミュニケーションを展開しておられるプロからセミプロの方々に再度あるいは新たに登場をお願いし、『続・多次元のコミュニケーション』の出版を企画した次第である。

本書では、第一章から第四章までは人と人との直接的コミュニケーションについてそれぞれの分野のスペシャリストに執筆をお願いした。第五章は他者を演じて聴衆の視覚と聴覚に訴える演劇を通したコミュニケーションを、第六章と第七章は主に聴覚を介した音楽家と聴衆者とのコミュニケーションについてそれぞれのスペシャリストに執筆していただいた。第八章から第十章までは主に視覚を介した芸術家と鑑賞者とのコミュニケーションについて執筆していただいた。第十一章は下界における様々なストレスに懸命になって応答する生活を離れて、精神的・肉体的鍛練のもとで天空に近い山の頂きを目指す登山愛好家によるコミュ

ニケーションについて執筆していただき、第十二章は自然科学者の一人として筆者が四十数年余の研究生活を通して体験した様々なコミュニケーションについて紹介したものである。

読者の皆さんが、様々な時と空間で活躍している執筆陣によるそれぞれの個性・感性・世界観・人生観や技力などによって得た、他者とのコミュニケーションの方法・技などについて興味をもってご自身の人生に重ね合わせることによって、より充実した人生を送っていただく端緒になれば、編者として望外の喜びである。

二〇一二年七月

長谷川宏司

続・多次元のコミュニケーション

目　次

まえがき……長谷川宏司…i

第一章　異文化人とのコミュニケーションについて……井上　進…1

一、文化についての再考　3

二、パーソナリティについての再考　7

三、宗教についての再考　11

四、仕事上のコミュニケーションの再考　13

（一）仕事の三面等価　13

（二）リーダーシップの関連性　15

第二章　小児看護を通したコミュニケーション……田崎知恵子…21

第三章　植物を介したコミュニケーション……山本　俊光…38

一、はじめに　38

二、園児の園庭での自然体験　39

三、大学生の幼稚園や保育所の頃の記憶と現在の暮らし方　45

四、高校生の植物の栽培体験と植物の好き嫌い　47

五、大学生の幼少期の自然体験と社会性との関係　50
六、勤務校の実態と生徒とのコミュニケーション　53

第四章　うつ病患者とのコミュニケーション……東中須恵子…58
一、こころの病　58
（一）看護学科の教育目的と方法　58
（二）精神科病院のいま　61
（三）資料からみたこころの病　64
二、うつ病とのつき合い方　68
（一）うつ状態・うつ病　68
（二）受診のめやす　70
（三）日常生活の過ごし方　70
（四）家族・友人のサポート　71

第五章　演劇を通したコミュニケーション……藤崎香奈子…77
一、作り手の間でのコミュニケーション　78
二、お客さんとの間でのコミュニケーション　85

第六章　作曲家と聴き手とのコミュニケーションについて……石田　匡志…91
一、「コモン・プラクティス（common practice）」と現代音楽について　91
二、幼少時代からの音楽的体験について～「コモン・プラクティス」への共鳴　95
三、現代音楽との出合い　97
四、聴き手または演奏者とのコミュニケーション　102
五、コンセプトの役割～プログラムノートを通したコミュニケーションについて　105
六、聴き手とのコミュニケーションにおいての今後の課題　108

第七章　楽器演奏家と鑑賞者とのコミュニケーション……岡村　重信…113
一、ピアノとピアニスト　113
二、ピアノとの出合い　116
三、十代でのリサイタル　118
四、苦しい日々　崩れ行く夢　121
五、アメリカでのコミュニケーションと目標のリメイク　124
六、教員としてのスタート・迷いと成長　127
七、ピアノ教育の中のコミュニケーション　129
八、ピアニストと作曲家のコミュニケーション　132

九、ピアノと聴衆とのコミュニケーション　133

第八章　彫刻を通したコミュニケーション……細野　稔人…135

はじめに　135

一、自己と自己とのコミュニケーション　138

（一）自分と自分との関係　138

（二）自分の中のもう一人の自分　139

二、作者と素材とのコミュニケーション　140

（一）石とのコミュニケーション　140

（二）木とのコミュニケーション　141

（三）塑造におけるコミュニケーション　144

三、幼少時代に描いた将来像との差異　147

四、彫刻における成功と失敗例について　152

（一）成功例　152

（二）失敗例について　157

（三）失敗をのりこえるために―楽しかった市民との出会い―　157

おわりに　158

第九章　書を通してのコミュニケーション……鳥塚　篤広…162
第十章　写真を通したコミュニケーション……音松　俊彦…182
一、決定的瞬間　182
二、被写体とのコミュニケーション　182
三、写真を見る人とのコミュニケーション　183
四、予期せぬコミュニケーション　185
第十一章　登山を通したコミュニケーション……常盤ひかり…192
第十二章　一科学者のコミュニケーションあれこれ……長谷川宏司…204
一、昭和の時代の教授には威厳があった　206
二、地方大学の学生にも極めて優れた学生がいる　209
三、オランダ留学中の体験　212
四、ドイツでの希有な体験　221
五、学会における学術的コミュニケーション　224
六、異分野研究者間のコミュニケーション　226

七、集団的コミュニケーションの怖さ　228
執筆者紹介……232